水を探る占いの杖

村下敏夫（環境地質部）
Toshio MURASHITA

ある初夏の夜　友人から30年程前を想い出させる電話があった．——中折帽子をかぶり　白い口ひげをたくわえた紳士の後を追って　麦秋の秦野盆地の水探しをしたこと　その紳士は白い布地の袋に両手を突っ込んで　一心不乱に地面から何物かを探り出すように歩いたこと　そしてここにあの方向からこの方向に走る水脈があると地面に靴で印をつけたこと　東京への帰りに小田急電車の網棚に無造作にのせたその白い布の中身が何であるかを確めてみたい気持になったこと——などその時に強く受けた印象が電話での応対中　鮮やかによみがえっていた．　電話によると　その紳士は正確ではないが数年前に故人となった．　しかし　その人が使用していた「**占いの杖**」を譲りうけた人が私のすぐ近くに住んでおられるという．

「占いの杖」による水探しの手法は　われわれの仲間では殆んど話題にならないが　日本に進出したヨーロッパの企業が日本の業者が探査し施行した地下水の取水施設を評価するために　わざわざ水占いを本国から呼んだことがあるほど　ヨーロッパの一部では今なお使用されているようである．　又　アフリカの避地にある教会に水占いの杖があって　電気探査の手法とどちらが水探しにすぐれているかと現地政府の高級技術者から真顔で質問されたこともあった．

その「占いの杖」をぜひ見たいから持ち主を紹介してほしいと　電話口で友人に繰返し繰返し依頼した．

それから2か月後　老婦人の別荘で念願の「占いの杖」を拝見する機会を得た．　「これが三雲康臣さんが使っていた水探しの道具ですよ」と差し出された白い布地の袋は　30年前に秦野盆地で見たものと全く同じであった．　そして　占いの杖を手にしたとき　胸の高鳴りを禁じ得なかった．

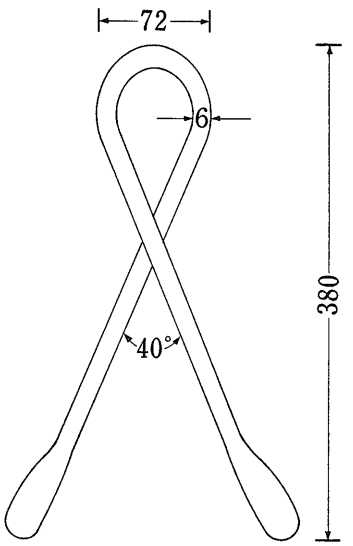
白い袋から取出したものは　変哲もない折れ曲がった一本の細長い棒に過ぎなかった．　外径約 6mm の棒は錆で赤褐色に染まった薄汚いガーゼで巻いてあった．ただ一か所が 1cm 程の幅で破けていたので　金属製品であることに間違いないが　どの種類の金属であるかはまだ分かっていない．

三雲さんは地質学とはおおよそ無関係の専門分野の出身の方であったが　第一次世界大戦後にチンタオ（青島）で　ドイツ軍人から水占いの手解きを受けたという．三雲さんがチンタオへ行った理由や　ドイツ軍人が水占いという特殊な技術を敵国人である彼に教えるようになった動機は詳かでない．　いや　老婦人から一通りの経緯を聞いたが直接三雲さんからではないので　この程度に止めておきたい．

私が手にした「占いの杖」はかのドイツ軍人が三雲さんに授けたものとは異なる．　後日　ある事情があって初めのものを真似て作ったものである．　その軍人は彼に向かって　この水占いの方法をイギリス人やアメリカ人に決して教えてはならない　ときつく戒めたともいう．

爾来　三雲さんはドイツ式水占いで　地下水を　温泉を　そして石油を探索して　日本国中を踏破した．　その結果は5万分の1の地形図に細かく書き込まれてあった　と老婦人は話してくれた．

私が三雲さんにお目文字がかなったのは　秦野盆地での現地調査の時と　国電目黒駅の近くのお宅を訪問した時の2回だけであった　30年程前に．



占いの杖の見取図
（金属製の棒を白いガーゼで巻いてある）
数字の単位は mm

Bagguette（占ひの枝）という用語を最初に知ったのは酒井軍治郎先生の御著「地下水調査法」（昭和16年初版第5章地下水探査法）を通じてであった．

酒井先生は　その中で　この手法は十五世紀の末葉欧州で流行した探水器の一種で　枝の両端をそれぞれ左右の手に握って地表を歩き廻り　地下水が存在する地帯の上に来ると　忽ち枝の頂部が一定の角度で傾斜せんとするある力を覚え　実際枝は運動を起こすといわれている．現在でも　フランスの片田舎で農民によって用いられているという話である　と説明しておられる．

又　先生は「地下水と井戸とポンプ」に「魔法の杖」（Wünschel Rute）と題して　占いの杖について詳しい紹介をしておられる．

その一部を転載させて頂くと――地下水調査または地下水探査は　湧泉または井戸など　いわゆる天然または人為的の地下水露頭を根拠として進められるのが普通であるが　この種の地下水露頭の殆んどまたは全く存在しない地域においては　（中略）　最近では専ら物理探査法をボーリングに先行させ　応用地球物理学的理論によって　地表から地下の地質状態を調査する方法が用いられている．　機械を用いて地表から地下水を探索しようとする試みは　ここに述べる魔法の杖をもって嚆矢とするようである．　極めて原始的な探水器の一種で　その操作はいわば原始的な物理探査法でもある――と．

魔法の杖の元来の形は約60度の角度をなす叉状の弾力性のある生の木の枝で　その分岐した枝を操杖者が上手握りか　下手握りに持って調査地を横切って歩く．　すると　前述のように地下水が存在する地帯の上に来ると枝が運動を起こすので　操杖者は同様な操作を隣接地へ次々と繰返し　遂に長い線状に延びる地下水の流路を発見するのである．

蔵田延男先生は　北京におられた当時ポーランド人がドロヤナギに似た植物の生木の枝で地下水調査を行ったのを見ておられる．　水脈の上に来ると枝の動きを感じ若し上向きに強く感ずる時は自噴圧を有する地下水　下向きに強く感ずる時は　流れの速い地下水脈であると判断したそうである．

わが国でいつ頃から占いの杖が使用され初めたかは分からないが　酒井先生によると　旧朝鮮総督府におられた小田某氏がこの杖の操杖者で　昭和14年の未曾有の大旱魃でかんがい用水が枯渇し　稲が枯死した折に各地の地下水探査を行ったとのことで　彼は操杖の術をドイツで習得したらしく　愛用の金属製の杖を錦嚢に入れて大切にしていた　という．

Wünschelrute というのは　独和辞典によると　占いの棒（柳などの二叉の若枝　水脈や鉱脈を探り当てる力があると信じられていた）であるから　私の知る限りでは　占いの杖には植物の枝と金属製の棒との２種類がある．

植物の枝は　太さ0.5～２cm　長さ約50cm のもので叉状の生木で　木の種類は限定されており　叉状に分岐した枝は同じように成長したものでなければならないとのことである．

私が見た金属製の杖は図のとおりで　太さ４mm　長さ38cm　重さ110gr であった．

操杖の術は　経験を積むと　杖の動き方で地下水　石油　カリ塩　硫化物　銅鉱　鉄鉱　石炭　断層　裂かなど何でも探索できるもののようである．

三雲さんの調査結果が書き込まれていた５万分の１の地形図には　断層が多かったと記憶している．　特に火山地帯に興味を持っておられたようで　旧火口の位置　断層の位置　潜在する温泉脈などが明細に記載されていた．

操杖者になるには　きびしい精神修養が必要であると聞いた．　前述のポーランド人は禁酒　禁煙そして数か月に亘る禁欲の後に　操杖したという．　三雲さんも禁酒・禁煙を　条件としておられ　ある期間操杖すると白髪になるともらしておられたそうである．

占いの杖による地下水の探索は　裂か水に向いていると考えている．　地下の浅部に一面に地下水が分布する平地では杖の動きが複雑であるが　裂か水がある岩盤地帯では杖の動きがその直上で敏感であろうと想像する．

閑話休題　　三雲さんが私財を投じて全国を踏破し水を　温泉を　石油を探して生涯を終えたそのエネルギッシュな行動を支えたのは何であったろうか．　夥しい野外調査の記録は何も残っていない．　関係者が持ち去ったのか　悲しい想い出を残さないように家族が処分したのか　勝手な想像しかできない．

しかし　水占いの方法がたとえ非科学的であると批判されようと　専門家が予想しなかった所から　低い確率ではあるが　地下水や温泉が　占いの杖によって発見された事実は否定できない．　若し記録が残っていればあるいは　占いの杖が持つ意味の科学的な立証が可能であったかも知れない　と残念である．